

大川小学校を訪れて (7/15)



自然をコントロールできると思う心のあり方こそ

生徒108名中74名、教師13名中12名が津波の犠牲になった子どもたちと教師の鎮魂のために、大川小学校を訪れた。

関東地方ナンバーの車も多く見かけ、たくさんの方が鎮魂に訪れ、供養塔(上の写真)に手を合わせていた。

なぜこんなにも多くの生徒と教師が津波の犠牲にならなければならなかったのか、「大川小学校事故検証委員会」が設置され検証作業が続いていることは、報道等でご存じの方も多いと思う。

実際の学校敷地に立ってみると、学校の直ぐ裏に山があるだけに、遺族にすれば「なぜ、もっと早く高台へ避難させなかったのか」との想いは当然かと思えた。

一方、実際に裏山は近づいてみるとかなりの急勾配で、当日雪も少し降って積もっていたようだし、低学年の子どもや近くから学校に避難してきた地域の高齢者のことを思うと、直ぐこの斜面を登らせることに教師たちが躊躇したであろうことも、想像できる。

また、子どもたちは教師に誘導されて学校前の道路(左の写真)を上がって高台に避難しようとした途中で津波に遭ったことを思うと、やはりなぜもっと早くこの道を使って誘導避難を決断しなかったのかとも思う。

あれこれ推測できるが、あの日、あの時の実際の状況は、検証委員会の報告を待つしかないだろう。

学校周辺の地理状況を目にしてまず疑問に思ったのは、北上川の増水・氾濫の危険・心配もあっただろうし、また、何かの折は地域の方々の避難場所となるであろう小学校を、近くの北上川にかかる長い橋より低く(学校の地球上の位置を子どもたちに教える石標が津波被害で倒れたままだったが、そこには海拔1m 12cmの文字)、道路一つと堤防を挟んで直ぐに北上川である「こんな所に、なぜ、学校を建てたのかなあ〜？」ということであった。

全国有数の超一級河川の北上川だけに、「堤防は頑強に作られているから…」との行政側の説明でここに学校を建てられたとしたら、何だか「原発は安全だから…」という安全神話に委ねた問題とどこか似ているかなと思った。

自然への畏敬を忘れ、科学的知識、技術等こそ万能と錯覚しがちな我々一人一人の心のあり方こそ、検証し続けることでないだろうか。

そのことが、大震災を決して忘れず、犠牲になられた方々への鎮魂の祈りに繋がるのことに思いつく帰途についた。

・「雑学BN」